
流星のロックマン ～今は青いこの星～

アポロン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン ～今は青いこの星～

【Nコード】

N8339H

【作者名】

アポロン

【あらすじ】

地球の危機を、幾度となく救ってきたヒーロー、ロックマンこと星河スバルは仲間と楽しい日々をおくっていた。スバル達は六年生に進学し、楽しかった夏休みが終わったところ、あらたな敵の影が…
――現在テストのため、休止中。本当にすいません。もうすぐ更新します。――

『第一部』登場人物

はじめまして、アポロンです。

本編を始める前に、ここで、登場人物を紹介しておきます。

オリキャラもでてきますし、

僕の文章力じゃ、小説中に、説明を書くのは
むずかしいので、書かせてもらいます m () m

| | | | | | |

星河 スバル

(男 12才)

ロックマンとなり、世界を3回 (+a) も救った、
まさしく世界の英雄。

自分がロックマンだということは、

父、大吾がいつてしまったため、ばれてしまった。

それ以来、きゅうにもてるようになったが、

さいきんミソラとは、いいかんじ…？

ウィザードは、ウォーロック。

響 ミソラ

(女 12才)

国民的アイドル。だが少し自覚がたりない。
じつは世界の英雄、ロックマンとともに
戦った「ハープ・ノート」だが、
世間にそのことは知られていない。

今回はいきなり…？

ウィザードは、ハープ。

白金 ルナ

(女 12才)

スバルのクラスの委員長。
通称「委員長」

スバルを不登校からたちなおらせた人のうちの一人。
なんだか最近スバルが気になる。

ウィザードは、モード。

牛島 ゴンタ

(男 12才)

大食い。ガキ大将っぽいが、
根っから優しい。

今も、どこかの村であがめられている。

ウィザードは、オックス。

最少院 キザマロ

(男 12才)

背が低い事、電波変換できないという
コンプレックスを持つ、ものしりな少年。

ウィザードは、ペディア。

ジャック

(男 12才)

元ディーラーのメンバー。

事件後、すぐコダマ小学校にもどってきた。

姉のクインティアの都合により、暁シドウの家に居候中。苦勞がたえないようだ。

現在、クインティアとともにウィザードなし。

神崎 幹

(女 12才)

スバルの幼馴染。

かなり昔にコダマタウンから引越してしまった。

親は二人とも科学者らしいが詳細は不明。

実は　　のことが……

昔はかなりスバルとなかがよかったようだ。

ウィザードは一応一般のウィザード

のようだが……？

双葉 ツカサ

(男 12才)

元多重人格者。マイペース。

もう一人の人格、ヒカルを封印する旅に
でていた。

その成果は……

ヒカル

ツカサのもう一人の人格。

親に捨てられた憎しみから生まれた。

ツカサと和解し、今は……

???

┆
—
—
—
—
—
—

とまあこんな感じです。

オリキャラ、後から出てくるキャラクターは、
でてきたら更新します。

設定

エクストラシナリオをすべて
経験している。

コーヴァス、ヴァルゴは再構築していない。

あと、かってながら、僕がかいた

S H O O T I N G S T A R R O C K M A N
o r y } S h o r t s t

の「シドウ、始動」のすぐあとと

させてもらいます。

シドウ、始動は、見てなくても大丈夫です。

すいません長くなりました。

もしよければよんでみてください（＾－＾）／

それでは m (_ _) m

登校（前書き）

第一話です（＾Ｏ＾）／

登校

「……で帰ってきたら、姉ちゃんと暁のやつが……」

スバル達の夏休みは終わり、彼らは学校に向かって歩いていった。

途中でスバルが、前からきになっていたシドウとクインティアの関係をジャックに聞いてみたところ、予想以上にもりあがり、だんだん、ジャックの愚痴になってきたのだ。

「二人とも、意外と大胆ね……」

「ジャックも大変だね」

ルナ、スバルは思ったことを、そのまま言った。

実際、ジャックは大変だ。

姉の都合で姉の恋人の家に住み、現在ウィザードはなし。

とにかく、いろいろ大変なのだ。

「まあ食費はうくけどな」

ククッ、っと笑いながらジャックは言う。

「そういえばスバル君。

ツカサ君、帰ってくるんでしょう？」

とキザマロが、大きく話題を切り替える。

「そうだよ。実は住む家ないらしいから
うちにすむようになったんだ」

「へー。そうなのか！じゃあこれから
スバルにあいに行くときはツカサさんに……ん？」

とゴンタ。彼のいうことは、正しいようで
ちがうような……？とにかくおかしいのである。

「いつてることがおかしいぜ！こいつ！」

いきなりウォーロックがでてきて、

案の定、ルナがおどろく。

ウォーロック恐怖症(?)は
直っていないようだ。

「ちょっと！いきなりでてこないでよ！」

ルナがおどおどという。

はつきりいって、らしくない。

みんなきざいているが、いってしまうと
あとがこわいので、だれも言わない。

…命がおいしいから

「うるせえなあ………ガアアアア！！」

さけびながらウォーロックはルナに
すごいスピードでちかよる。

「キャアアアア！」

ルナは、さけびながらウォーロックから逃げる。
それを、ものすごく楽しそうな、
ものすごい笑い声をあげながら追いかける
ウォーロック。

「スバル君！はやくこの化け物をけしなさい！」

にげながらもすぐくえらそうだ。

そう、これがほんとの白金ルナなのだ。

スバルは、半分あきれながらも、

「ウォーロック、いい加減にしなよ」

といってウォーロックをハンター（ハンターVG）
にもどす。

……命がおいしいから

「くそ、スバル！てめえ「だまりなさい！」

ルナがさえぎる。

「よ、よくやったわスバル君」

なんていつてるルナは虫の息だ。

「はっ！もったえないお言葉！」

スバルが敬礼しながらいうもんなので

「さすがに敬礼までしなくてもいいわよ…」

さすがにそこまでしてほしくないのか
少しひかえめにいう。

「もう学校つきましたよ！」

そう、がやがやしてるうちにもう学校についていた。

そして…

キンコーンカーンコーン

「まずいぜ！遅刻する！」

あせるジャック

「私が遅刻なんてしたら、ほかの生徒にしめしがつかないわ！いそぐわよ！」

ルナがそういうと、スバル達はいそいで教室にむかった。

登校（後書き）

時間ができたので
一日はやくできました！

転校生

「…ふう…なんとか間に合った…」

スバル達は確かに、時間内に教室についた。

でも、なんとか、ではなかった。

「……ジャック……まだ10前じゃなくて…?」

「いや、まあ、うん、はい……」

今のルナの後ろには、たしかにオーラが見える…
無駄に走らされたからだろう……ジャックに。

「じゃああの遅刻するぜ!、ていうのは
どういうことかしら……?」

そのとき、彼らはおもった。
ヤバイ、コワイ、と。

ジャックは必死に涙をおさえている。
キザマロなんかはなっていた。

「だって…チャイムなってたぜ…?」

「時間は見なかったのかしら？」

「はい……」

するとルナはあきれた表情でいう。

「まったくあなたとゴンタは…
まあ今回は私も時間みてなかったしね。
今回はもういいわ」

ジャックは心のそこから喜んだ。

「今回は…だけどね」

ルナはほかの人に聞こえないような
ちいさなこえでつぶやいた。
だが……

（キザマロ君……聞こえたかい？）

（委員長、怖すぎです……）

キザマロたちには確かにきこえていた。

「ところで委員長。転校生って

ツカサ一人か？」

ゴンタが珍しく普通のことを聞く。

「3人よ」

「さっ、3人ですか!？」

「この時期に？」

「マジかよ…」

上からキザマロ、スバル、ジャックの順で言う。
聞いたゴンタは、この事態の異様さがわかっていないようだ。

「でも隣のクラスにも2人、くるみたいよ」

「そうなのか…計5人…なんてこったい!」

「ジャック…それどこの方言？」

「ほらみんな席につけ」

いきなり担任の育田がクラスに入ってくる。
この学校は、1，2年3，4年5，6年が
くりあげ式なのでクラスも先生も同じなのだ。

「えー、もうみんな知ってるかもしれないが、転校生を紹介する！」

先生の言葉で教室がさわがしくなる。

「みんなしずかに！転校生が入りにくいだよ！」

この一言で、いちおうしずかになった。

「じゃあ三人とも、入ってきなさい」

三人と聞いてまた教室がざわついた。
しかし入ってきたのはツカサ一人だった。

「えーと…双葉ツカサです。
また仲良くしてくれるとうれしいです！」

ツカサがそういうと、

「おかえりー！」

「どこ行ってたんだよー！」

なんてこえが聞こえてくる。

しかし後の二人が入ってこない。

「ほら二人ともはいってきなさい」

育田はやさしくいう。どうやら二人は緊張して入ってこれないようだ。

「おいマズイぞスバル！」

「なにが？ ロック」

二人は小声ではなす

「あいつがいるんだよ！ あいつ」

「あいつって？」

「あー！ 名前も言いたくねえ」

「それって……アシッド？」

「ちげーよ！ ああ…俺様の学園ライフが…」

その時、教室に一人の少女が入ってきた。
この国に知らないひとはいない、
とまで言われる国民的アイドル

「響ミソラです！ よろしくお願いします！」

「」「」……………」」「」」

クラスはしずまりかえり、ミソラの表情もくもってくる。

「……」

スバルも例外ではなく、口をぽかーんとあけて驚いている。

「きちまったぜ……あいつも一緒に……」

ウォーロックの表情もくもっていた。

「お前ら転校生がきて拍手のひとつもないのか」

ぱちぱち……

先生にいわれてみんなやっと拍手する。

ひかえめに。

相手はあの響ミソラだ。そうなるだろう。

ミソラはいまにもなきそうだ。

「えーと……ほら神崎！入ってきなさい」

育田はのこりの転校生を紹介しようとする。

空気がおもすぎる

「！　はい！」

廊下からかわいらしい声が聞こえた。

スバルはいまだ放心状態だ。

そんな空気のなか、少女が一人、
教室に入ってきた。

「神崎幹です…えっとあの、カンザキミキです……」

重い空気が一部かわった（男子席）

その転校生も、ミソラにおとらず
かなりかわいかったのだ。

そんな中、スバルは叫んでしまった。

「ミキ！」

いきなり名前をよばれてビクッと震える。
しかしスバルのほうを見ていった。

「スバル！！うそ！なんで！！」

ミキはまわりを忘れてはしゃぎだす。

「ひさしぶり！スバル！」

転校生（後書き）

ここで終わります！
なるべく今日中にもう一話
がんばります！

再開（前書き）

初電波変換がなさないことに・・・

再開

「ほんと久しぶりだね」

「ほんとだね」

今スバルとミキは学校の屋上にいた。

二人ともつかれたのか、ほとんど棒読みだ。

なぜ二人は疲れているのか……

その影にはさまざまな試練が…

～回想～

「ひさしぶり！スバル！」

まずミキがそういうとクラスの

女子がミキに疑い（？）の目を向けました。

まあスバルロックマンだしね

まあスバル世界の英雄だからね

まあスバルもてるしね

そのスバルをこの女は呼び捨てしたからね。
そりゃあそんな目で見るさ。

それにもっとヒドイのはここから。

スバルも呼び捨てしてました。
なきそうだったミソラの目に嫉妬の炎がうつりました。

「ねえスバル君どういうこと!？」
ミソラはスバルにつめよりました。
顔がかなりちかいです。

そこでクラスの男子たちはきずいてしまいました。

(スバル君?)

この二人、知り合いだということに。

たしかにスバルは世界の英雄。
しかし、男にはゆずれないものがあるのです。
このさい、はずかしがっているばあいでは
ありません。

「「「スーバール」」」

男どもがスバルをとりかこむ。

「え？ん？う、うわあああ！」

スバルが叫びだす。

そんなスバルにようしやなくつめよる

ミソラ軍団。

いつのまにか、男どもの指揮はミソラがとっていた。

「やっておしま……」

ミソラがとどめをさそうとしたとき、

「スバル君……」

ものすごい覇気をふくんだ声が聞こえた。

ミソラ軍団は、その一人のために道をあける。

「い、委員長……！」

「どういうことかしら……！」

ルナの後ろには血だらけになった

ゴンタ、キザマロがいる………のような気がする。

ジャックは後ろではらをかかえて笑っていた。

ルナの放つ覇気におじけずいたスバルは、

逃げることを決心した。

「と、とらんすこ……ど、

しゅ～ていんぐすた～ロックマン」

かなり動揺していたのでかみそうになった。

「ちょ、卑怯よスバル君！
ゴンタ、おっかけなさい！」

「じ、じつは今日はハンター家にわすれちまってよ！」

「きく！このやくたたず！」

「め、めんぼくねえ…」

「ハープ、おいかけ…あれ？」

ミソラも電波変換しておいかけようとしたが
ハープがいない。

そして……

今度はミソラがかこまれていた。

「あれ…？」

男女とわず。

このできごとによりかいほうされた
ミキは、ロックマンが向かった、
屋上へむかった……………

「もどつたらどうなるかな……」

「もどらなきゃいいんじゃないかねえのか？」

「そんなわけにもいかないよ……」

そういうとスバルはハァ… とため息をついた。

再開（後書き）

感想まっています！

屋上（前書き）

キャラクターに神崎 幹追加しました！

屋上

「今授業中だよね？」

ミキはスバルに聞いた。

「まあそうなんだけどね」

「一日ぐらいいいんじゃないの？」

とミキ。

「うーん…ってミキ今日転校してきたんじゃない！」

たしかに…。

「いんじゃない？それにクラスの人たち

私のこと変な目で見るんだもん。

もどりたくない」

ん？とスバルは思いミキの事をよくみてみた。
そしてきずいてしまった。

「どしたの？」

スバルの顔は真っ赤だ。

スバルは後ろを向きながら言う。

「ボタンあいてるよ…」

「え？」

スバルがぼそぼそいうのできこえなかったようだ。

「ワイシャツのボタンが3つもあいてるよ。」

「!!!」

スバルの言葉をきいていつきに赤くなった。

「みてないよね？ みられてないよね!？」

ミキがパニックッてめちゃくちゃな事をいう。

「いや…見られたからみんなみてたんだと思うよ…
それに僕がみてきずいたんじゃない…」

バコッ!!

「いて!!グう?グーでなぐっちゃうの!?!」

まさしく逆切れ。

「うるさい!うう」

となくまねをする。

「ぎ…ごめん……」

「……………」

「ホントゴメン!」

スバルはついに土下座した。

「うそだよソ!怒るわけないじゃん
こんなことで!だいたい昔は
いっしょにお風呂も入ったことあるじゃん!」

スバルはブツ！、とふきだして赤くなった。

「そうなのか？ スバル？」

ウォーロックは満面のいやらしい笑みを見せる。

「いやすごい昔のことだから！」

「でも、はいったんだろ？」

ふたたび満面のいやらしい笑み。

「…うん、おさななじみだし…」

「ほう…幼馴染ならいいのか。

じゃあまた今日にでも…」

さすがにこれには二人の鉄拳が炸裂した。

「…なんでだめなんだ？ こうなったら…」
すみでアル計画をねるウォーロック。

「ねえスバル」

「なに？」

するとミキはスバルの耳元でいった。

「ツカサ君ってかっこよくない？」

「え？」

スバルはまたぼかしくなった。

「え？もしかして期待してた？」

ミキは冗談っぽくいう。

「いやまったく」

「うわ…逆にショックなんだけど…」

するとウォーロックがいきなり…

「おいスバル、俺は、どっか行く！さがすなよ！」
とあわてていう。

「どうしたの？ロツ…ク？」
スバルがたずねるころにはもうすでにウォーロックは

空のかなただ。

「ふふっ！ ロック君っておもしろいね！」

「いや…でもおかしいのはたしかだよ…」

なんて話をしていると……

「ポロロン…お二人ともなががいいのね」

ハープだった。だからウォーロックは逃げたのか。
と心の中であつとくする。

「ハープ、いつからいたの？」
と、スバル。

「最初からよ。スバル君の気持ちを確認たくて。
まあそういう関係じゃないならいいわ。じゃああとでね！」

そういうとハープは、床をすりぬけて行ってしまった。

「なんでそういう関係だとだめなんだろう？」

(…？もしかして、スバル、今でも鈍感？)

だよね、スバルだもん、と自己暗示。
なっとく。

ウィーン…

とつぜんドアが開いた。

そこにいたのはもちろんルナ。
率いるクラスのみなさん。

「スバル君？ 一時間目、終わりましたけど…
神崎さんも、転校そうそうなにしてるのかしらね…」

先頭のルナは、ヤバイ。さっきとはくらべ物にならない。

（やばい…足が笑い出して…）

スバルは足が笑い出してうごけなくなった。

ミキはすすり泣き出した。今度はホントだ。

さすがにこれにはルナも、

「え？ 神崎さん！？ ……あのもういいわ！

ゆるしてあげるから、ね？」

めずらしく下手にでる。

しかしミキは泣き止まない。

そこにきたのは、ザ・マイペース、ツカサだった

「委員長、やりすぎだよ」

といってから、

「大丈夫？」

とミキに声をかける。

「……はい」

ミキは短く答える。

（（（かわいい…）））

と思わなかったのは二人でけだった。

（僕の時と全然ちがうじゃん…）

と思ったスバルと、

（委員長、やりすぎだよ…）

あきらめるツカサだけだった……。

屋上（後書き）

ツカサくん……………

はいもうめちゃくちゃですね（笑）
わかってるんです…わかってるけど
うまく書けない…

評価感想アドバイス、待ってます！

居候（前書き）

登場人物にツカサ、ヒカル追加！

居候

時は進み、帰り道

ツカサとルナは険悪なムードのままだ。

「ねえ二人とも…もうやめない？」
スバルはあきれたようにいう。

ちなみに現在のメンバーは、いつものメンバープラス、ミソラ、ツカサ、ミキだ。

「だって何がやりすぎなのよ！」

スバルの言葉のせいで、またルナが怒り出した。

「だって泣かせるまで怒らなくても
いいんじゃないの？」

ツカサも反論する。

「まあまあ…ルナちゃん…ツカサ君も
せっかく帰ってこれたんだし…
いいじゃん！」

とミソラ。あくまでまるくおさめようとする。

「「よくない!!」」

二人は声をはもらせた。

その後も、ミキのあのことで二人の喧嘩は続いた。

その間ミキが胸をはずませていたのはいうまでもない。

理由はツカサが自分のため（？）に怒ってくれたからだ。

「そういえばツカサ君はスバル君の家で暮らすんですね？」

「そうだよ」

キザマロの質問に、短くツカサは答える。

そしていきなり、

「親、　　っていうのはどういうものかね？」

いきなりジェミニ（？）がでてきて言う。

「やめなよヒカル」

ツカサはすぐ、ハンターにウィザードをもどす。

「は？ヒカル？」

スバルは哑然とした。

ほかのみんなはおどろいていない。

ミキは意味がわからない。

「まあ後でツカサくんから聞くことね。

私たちは、アナタがいない間に
ききましたけど。」

ルナはそっけなくスバルに言う。

まだ怒っているようだ。

……二つとも。

「で、ミソラちゃんは？」

またまたキザマロが聞く。

「ルナちゃんちのマンションだよ！
隣はルナちゃんちだから安心なの！」

この言葉を聴くかぎり、ルナは
ミソラが来るのを知っていたことになる。

こわいから言わないけど……

「で、ミキは？」
これはスバルだ。

「あそこの家だよ！」

と言ってゆびさしたのは、

スバルの家だった。

「は？ あそこ僕の家だよ？」
とあきれてたずねる。

「え？ ちがうでしょ。だってお母さんが、
しばらくここの家がアナタの家よ、って」

そしてスバルはあることにきずいた。（また？）

「アナタ？」

「うん。なんかいそがしいからって？
私ひとりでだって？」

途中から話が見えてきたウォーロック。

（つまり、ずばり、オフクロが隠してたって
わけだな。）

「しばらくミキをあずけたってことじゃね？」

ウォーロックが思ったことを言う。

「え？じゃあうち二人来るの？」

「そうみたいだな！」

ハア…と落ち込むスバルに、アル作戦（前話参照）
を決行した。

「まあよかったじゃねえか。
これでまた、二人で風呂はいれてよ！」

言い切った。ウォーロックは言い切った。
アル作戦、それは、ミソラ、ルナがいる前で

居候（後書き）

しばらくこの一日です（笑）

感想まっています（^O^）／

家（前書き）

タイトルが・・・

家

あのあと、地獄のような尋問を、

「昔の事だから！」

「幼なじみだから！」

「今は入らないから！」

の一点張り（三点？）で乗り越えた

スバル、ミキ、そしてツカサは

ついに家に……

「ちょっと二人ともまって！」

そう言ってスバルは一人家に入って行った。

「あらお帰りなさい」

何もない顔をして言ってくる。何だかスバルは腹がたった。

「母さん！なんでミキくること隠してたのさ！」

スバルは声を荒立てる。

「ミキちゃんの事？」

いいじゃない別に。それともスバルは
ミキちゃんが来ちゃ嫌だった？」

そんな事を聞いてるんじゃない！

まあスバルの答えはNOだけど：

「じゃなくてなんで隠してたの！？」

同じ質問を繰り返す。

「もちろんサプライズよ！スバル達の驚く顔が見たくて」

「僕達？もしかして母さん？」

あかねはもちろん、という顔で答える。

「ミキちゃんのお母さんにも私が口止めさせたのよ。」

スバルはやっぱり、って顔をする。

「まあいいけどさ…父さん帰って来て一年も立ってないのによくOKしたね…それも二人も」

確かにそうだった。こんな時は
しばらく家族水入らずで楽しみたいだろう。
それなのに……

まあスバルはいいんだけど。

「大吾さんなら悩むことなく……」

「家族が増えるなんていいことじゃないか！
それにもうウォーロックもいるだろ？」

「とか言ってたわ」

「流石父さん…尊敬するよ…」

スバルは皮肉のつもりで言ったがあかねはそうとは思わない。

「ほんとよね。流石大吾さんだわ！」

今もまだまだ若い二人。
ラブラブなのだ。

「母さん…もう二人入れるよ……」
あきれたスバルは言う。

「はいはいどうぞ」

そして……

「おばさん！お久しぶりです！」
ミキは声をあげる。

「ミキちゃん！大きくなったわね！」
とあかね。あかねが最後にミキを見たのは、
幼稚園、年長組の時だったのでかなり大きく見えるはずだ。

「これからお世話になります」

コレはツカサだ。

「いらっしやいツカサ君。コレからはここを家だと思っ
ていいのよ？」

とあかね。優しい言葉だ。
でも

「ありがとうございます」

ツカサには、今いちぱつと来ないらしい。

まあ無理もない。彼は物心つくまえに
生みの親に捨てられたからだ。そしてヒカルという
もう一人の人格が生まれてしまった。

親への憎しみから

そういえばヒカルはどうなってるんだろう。

スバルがそんな事を考えていると、

「ただいま」

大吾だ。大吾が帰って来た。

「お！ツカサ君、ミキちゃん。これからよろしくな！」

「はい！」

「よろしくお願いします」

返事したのはミキ、
頭をさげたのはツカサだ。

「立ち話もいいけど…
ホラ入りなさい」

あかねの言葉でスバル達は家に入って行った。

家（後書き）

短いです。きりがいいので・・・

感想まっています！

家族（前書き）

そろそろ本編いかなきゃ・・・

家族

「へー！そんな事があったんだ！」

スバルは感心する。今食卓でツカサとヒカルのお話を聞いている所だった。

ツカサ達の話はこうだ。

ツカサはヒカルとのけじめをつける為、ナンスカで修行していた時、ヒカルはツカサと戦うだけじゃ満足行かなくなった。

そこにちょうどスバルが来て、戦った。（流星2）

その時ヒカルの中で何かが変わったようだ。

（復讐なんかよりバトルのほうが楽しくね？）

その時のウェーブバトルは、スバルが勝ったのでヒカルの心にさらに火がついたみたいだ。

でもヒカルはツカサの憎しみから生まれた人格。

楽しむなんて許されない。そしたら自分は消えてしまっー

そう思ったヒカルは、どうにか別の体のを欲しがった。

ツカサは、残留電波を自由に使って電波変換できるほど

コントロールできるので（ヒカルと二人でのコントロールだが）
「ジェミニ」の体を外に出す事くらい簡単だった。
その空っぽのジェミニの中に入ってでてきたのが
ヒカルだ。

今、ヒカルはツカサのウィザードだ。

つまり今は二重人格ではない。

「ツカサ君って二重人格だったんだあゝ」

ミキはツカサと会ったのは初めてなので
ここから理解する。

「そんな事大声で言っちゃダメだよ」

スバルはミキに注意する。しかしツカサは

「いや良いんだよスバル君。ヒカルは僕の、唯一の家族みたいなものだから」

「まあ元々一人だしな！」

そういうヒカルの外見は、ジェミニだがどこか違う
違和感をウオーロックはおぼえた。

「ん？ククク、コイツ顔が一つしかないせ！」

そう、今のジェミニ（以後ヒカル）はオリジナルと違い、顔が一つしかない。

「ふたご座なのに…クク顔が…ククク！
一つしかないぜがははは！！！」
ウォーロック大爆笑。

「うるせえ！俺はヒカルだっつうの！」

二人（二体？）のケンカが始まったが、スバル達はそれを無視する。

「ミキはどうしてきたの？」

「いや、私も知らないからこんな事になったんじゃない
とミキ。」

「ミキちゃんがきた理由はね」

話を始めるあかね。

「ミキちゃんのご両親ってなんかすごい科学者じゃない。
それでここ数ヶ月、何かの開発で
家に帰ってこれないんですって。それで頼まれて、OKしたわけ。」

あかねが簡単に説明した。

「確かに神崎夫妻は二人してすごい科学者だよ」

と大吾。あった事はあるのだろうか。

「二人とも、また言うけど、ここはあなた達の家よ。

ミキちゃんも、ご両親、下手したら一年は帰ってこれないみたいだから…」

もちろん驚くミキ。

「「一年!?!」」

スバルも驚く。

ミキの顔は、心なしか曇って見える。

……………

「ツカサ君はいつまでいるの母さん?」

何となく耐えられないスバルは、つい口を開いてしまった。

「ツカサ君は、何か無い限り、…ずっとよ!」

「「え?」」

今度はツカサも驚く。

「いいんですか？」

「もちろんよ！」

とそこでスバルが口をはさむ。

「その何かって例えば？」

「うーん……ツカサ君が結婚したり？」

あかねの言葉にツカサでは無く、ミキが赤くなる。

「ミキ、赤くなってるよ！」

とミキのウィザード。

「うるさいなこのドングリ！」

ミキは言い返す。

「ドングリ？」

大吾が聞く。

「だってドングリみたいじゃないですか！」

でもホントの名前は別にあるみたいですよ！」

知らないの？

みんなそんな顔をしていると、ミキが

「だってお父さんがくれたんだもん。名前教えてくれなかったし…」
と言った。

「でもなんでさっきミキちゃんが赤くなったのかな?」
とあかね。

するとさらにミキは赤くなった。そして黙り込んだ。

「母さん……」

あきれるスバル。よくわからないツカサ。そしてケンカする二体。

こうして本当の家族のような食事は続くのだった……

家族（後書き）

きのうできなかったのもう一話いきます！

影（前書き）

本編の予感♪

影

「悪いけど、二人ともスバルの部屋で寝てくれる？」

「僕はいいけど？」

「僕もいいですけど、ミキちゃん、女の子ですよ？」

上からスバル、ツカサ。

「でもあいてる部屋ないのよね…」

あかねが、お願い！

と言わんばかりに手をあわせるので、

「いいですよ！」

とミキは言う

（まあツカサ君いるしそうだよね）

心の中で思うスバルだった。

「じゃあ二人は布団でねる？
何なら僕のベッド使ってもいいけど……」

スバルは二人に聞く。

「私布団じゃないと寝れないの！」
(????)

この言葉に疑問を覚えたスバル。

「僕もスバル君に悪いからいいよ」

このツカサの言葉を聞いたとたん、ミキの顔に満面の笑みが。

(こういうことか！納得。)

「ツカサ君。」

「何ミキちゃん？」

「変な事しないでね！」

(誘ってるのかそれは！)

スバルはそんな事を思ってしまった。

「大丈夫。なんなら離れて寝ようか？」

ミキの言葉は裏目にでてしまったようだ。

「ううん、冗談！これから一緒に暮らすのにそんな事言えないよ！」

起死回生の一言だ。

案の定、

「わかった。ありがとう！」

なんてツカサに言われてハッピーな気分だ。

そのとき、

「ん？電話だぜ！」

とウォーロック。

「誰から？」

これはスバルだ。

「ミソラだぜ！」

「え?!」

スバルの嬉しそうな声が響く。

ツカサとミキは声を殺して笑っていた。

「ヤッホー、スバル君！」元気な声がハンターから部屋に響く。

「どうしたの？」

「あのね……スバル君ちにミキちゃんきたでしょ？………
ーあっ関係ないんだった！それでね、あの……」

「うん」

スバルはあえて関係ないんだった話は聞かない。

また苦痛が待っているから。

「その…買い物行かない？欲しい物があるの…」言い切ると
ミソラは不安そうにスバルを見る。

「うん！いいよ！いつ？」

OKもらった瞬間、

「ホント？やったあー！じゃあ今度の日曜日は？」
元氣爆発した。

「わかった！じゃあ委員長達も…」

といいかけたら…

「ダメ！！！」

突然の大声でスバル達の体がビクツとなった。

「なんで？」

スバルは聞いてみる。

「え？あの、その：

映画も見たくて！券が2つしかないの！」

ん？なんか動揺してるなあ？

だけど：

「そうなんだ。じゃあ仕方ないね！二人でいこうか！」

スバルはきずかない！

とりあえずその言葉が聞けて、ほっとした。

「うん！じゃあまた明日！学校で！」

「うん！また明日！」

ブチッ

もちろん電話が切れたあと、二人にからかわれたスバルだった：

ー影ーウェーブロードにてーー

「本当にあんなやつがロックマンなのか？
本当に……あんなやつに負けたのですか……？」

ハイド様……」

影（後書き）

どうでした？

たぶん、つぎあたりから入って行きます！

感想まっています！

買い物

そう、コレはデートではない。買い物なんだ。

スバルは自分に言い聞かせる。

時はとんで、日曜日。

今、スバルとミソラは、ロップンドーヒルズに
買い物に来ていた。
もちろん誘ったのはミソラだ。

「で、ミソラちゃんは何を買いにきたの？」

「え？…えっとね…」

（せめて買うもの位決めときなさいよ！）
ハープは小声でミソラに言う。

（だって…ただ二人で来たかったただけだもん）

皆さんおきずきかもしれないが、買い物、というのは、
ミソラがスバルにきてもらうための名目である。
スバルはそうは思っていないが…
（それでも少しは思ってるけど）

「あの……ふ、ふぐ！服が欲しかったんだぼ！」

おもいつきり噛む。

「ははは…大丈夫ミソラちゃん大丈夫？」

心配そうに、でもどこか呆れて言うスバル。

「うん…だいじょぶ」

「ねえスバル君！これとこれ、どっちがいいかな？」

ミソラはスバルにどちらの服がいいか聞いた。

スバルからしてみればどっちでもいいのだが……。

「うーん…。僕そういうのわからないからなあ…」

悩むスバル。本当にわからないのだ。

かといってきとうに決めるのは失礼な気がする。

「えー…。そんなんじゃ女の子おとせないよ！」
顔を膨らまして怒るミソラ。

関係ない話だが、こういうことは

ミソラみたいな人がしないと、アレな気がする。

「どしたのスバル君？
顔あかいぞ〜？」

軽い調子でミソラは言うが、

「いや、可愛いなく、と思って」
ストレートにスバルが言うもんなので、ミソラが赤くなる。

「さすがアイドルだね！」

スバルはアイドルで、という視点で褒めたようだ。
でもミソラは今、
バラ色の夢の中なのできずかない。

「ミソラちゃん……今日なんか目が痛いなく……」
スバルがそんなことをいうと、ミソラがルナばりに睨みをきかせてくる。

「なんて思ったり思わなかったり……」

ミソラが持ってきた映画のチケットは、

「真・ゴーストクライシス」
という映画だ。」

ゴーストクライシスといえば、ハイドが事件を起こしたせいで、
「本物の幽霊がでる！」

って噂がたって、打ち切りになった映画だ。

あの、ひょう、ひょう！、言ってた人はどうなったのだろうか。

「まあ見てみたらあんまし怖くないかもよ？」

ミソラはスバルの腕にだきつきながらそういって、
二人は仲良く映画館に入って行った……

2時間後――

「スバル君？大丈夫？」

映画館からでてきたスバルは放心状態だ。

「……………」

返事がない。ただのしかばねのようだ。

「ねえスバル君……あっちのお店行かない？」

ミソラがそう言った、すぐ後の事だ。

ドゴーン！

エレベーターの辺りから、爆発音が聞こえてきた。

「ロックマン！ここにいるんだろ？
でてこい！！」

どうやらこの声の主が
この騒ぎを起こしたらしい。

「おいスバル！狙いは俺達だ！いくぞ！」
ウォーロックはいそいだという。が……

「オバケ、オバケ……」
未だ放心状態のスバル。

「スバル！！！」

ウォーロックはついに怒鳴る。

「えー!? 何? ……うわ!! 燃えてるよ! あいつか? いこう! ウォーロック!!」

「んったくよー! いくぜ」

「ミソラ! 私達もいくわよ!」

「もちろん! 準備はいい? ハープ?」

「「トランスコード!!」」

買い物（後書き）

もうすぐ戦闘です！

闇（前書き）

戦闘短い・・・
しかもわかりにくい・・・

闇

「来たか！ロックマン！」

謎の電波体は声をあげる。

その電波体の体は、人型、色は赤く、血に染まっているようだった。

「お前はなんなんだ！？」

ロックマンは戦闘体制に入り叫ぶ。

「けっ！敵に聞かれて自分からいう奴がいるのかよ！」

そういつて電波体はロックマンに襲いかかってきた。

「ぐっ…バトルカード！エドギリブレード！」

ロックマンは敵のタックルを受け止める。

「ククク…さすが世界のヒーロー！だか…」

すると電波体の肩の部分から、体より、さらに赤い液体が出てくる。それが手首の部分までくると、固まり、リングとなった。

そして腕を振り回し、ロックマンを攻撃する。

「なんなんだ…この力は！？
電波変換か？」

「いうかよ!」

電波体は、手首からリングを外し、ロックマンに投げつける。

「くっ!」

「ショックノート!!」

リングは横からとんできた音符にはじかれる。

「私達の事、忘れないでよね!!」

「全くよ!」

「ありがとう! ミソラちゃん!」

「あめーよ!」

「!?!?!」

電波体はハープ・ノートの後ろに回りこみ、後ろから首に手をかける。

「じゃまだな…コイツ…。先にやる!」

そういつて電波体はハープ・ノートの首をしめる。

「ぐ…あっ…」

「ミソラちゃん!」

その時、スバルの中で、何かが動いた。

…ドクン…

「ス、…スバル?」

「ウォーロック…いくよ…」

その瞬間、ロックマンは消えた。

「スバル…く…ん」

「ク…ククク…!逃げやがった!世界の英雄が!
きいてあきれるぜ!」

だが電波体がい切ったとたんに、目の前に、ロックマンが…

「く…！ ロックオンか！ ござかしー」

バギッ

「ぐあ！」

バギッ

ボギッ

「ぐあああああ！」

ロックマンは一本一本
関節を折っていく。

「スバル君…？」

バギッー

「あああああ！！！」

ロックマンは手を止め、
電波体に問う。

「キサマはなんだ？」

「…言うわけないだろ…」

ボギッ

「ガアアア…」

「答えろ…キサマの名を…」

ロックマンはすでに、首に手をかけている。

「……俺の名は、……ブラッド…」

「他に言うことは、無いのか？」

「……………」

ブラッドはだまりこむ。

「無いんだな？」

「俺の言える事は…ここまでだ…」

「ソウカ…」

感情のこもっていない声——

ボギィッ——

ブラッドは、首をロックマンにおられ……

死んだ——

電波変換がすでに溶けていたミソラは、戦闘から背を向け、泣いていた。

聞（後書き）

感想、待ってます！

変化

『……！なんだこりゃ……？』

ウォーロックは驚きの声をあげる。

ウォーロックの目の前には、

破壊されつくされたロッポンドーヒルズ。

さっきまで戦っていたはずの、電波体が、
無残な姿で倒れていた。

そしてその横にたたずむスバルの姿。

彼は、うつろな目をしていた。

『スバル……？』

ウォーロックは不安になり、スバルに話かける。

ウォーロックはちかようとするが、ハープにはばまれる。

『なんだよ……』

ウォーロックがハープに聞くと、

ハープは無言で首を振った。

「スバル君……」

ミソラはスバルに近寄って、話かける。
まだ涙があふれ出ている。

「ミソラちゃん……僕は……」

するとミソラはスバルに一気に駆け寄り、抱きついた。

「いいの……スバル君……」

ありがとう……助けてくれて……」

そして、スバルも、ミソラに抱きつき、
悲鳴のような、聞いているだけで苦しい声をあげ、
泣き続けた。

僕はどうしてしまったんだろう……

なんなんだ……この変化は……

僕はいままで、人を殺めこと、

あつたか……？

いや、ない。

こいつは電波体なのか……？

人なのか……？

それとも、電波人間……？

僕はいままで、電波人間を殺したこと、

無いよな……？

もし人なら……

もし電波人間なら……

僕は人殺しだ……。。

報道

「前日、ロップンドーヒルズにて……」

昨日――

あれほどの事件が、ニュースにならない訳がなく、ほとんどの番組で、その件について、特番でやっている。

朝10時ちょっとすぎ。スバル達三人は、あるニュース番組を見ていた。

ちなみに、今日、学校は、開校記念日で休み、あかねはでパート、大吾はWAXAで仕事中だ。

二人とも今日は仕事を休むといったが、スバルが無理やり行かせた。

二人がいると、なんだかまた、泣いてしまいそうだったから……

なぜ、この話題がそこまでテレビで言われるのか。
それは、あの時の映像を、カメラに収めた人がいたこと、
そしてそのカメラが戦闘シーンをとらえたこと、
本当の問題、
それは……

ガンガン！

「星河君！ いますか！？」

「どうしてあそこまで
したんですか！？！？」

マスコミが真実を聞きにくること。

ロックマンがブラッドの

首を折って殺害した事についてである。

「スバル君……」

ツカサが心配そうに、顔を曇らせて言う。

「……大丈夫だよ……」

全然大丈夫じゃない
答えかたである。

「ホントに大丈夫？」

ミキもまた、スバルを心配する。

「大丈夫って言ってんだろ！」

ビクッ

思わず二人は硬直してしまった。

「ごめん…今は一人にしてくれないかな……」

そういうとスバルは
電波変換して、
展望台に、向かって行った……。

報道（後書き）

一人に
て言
てる
のに
ウォ
ーロ
ック
いま
す（笑）

敵

ー展望台ー

「…ウォーロック……。僕どうしちゃたのかな……。？」

スバルはウォーロックに聞く。

今にも消えてしまいそうな、

とても悲しい声で

「ありゃ…人間じゃない。…気にするな……」

「どうして言い切れるんだよ！」

「スバル……」

「ごめん……。本当に…どうしちゃたんだろ……」

プルルルルル！

「スバル…暁からだぜ……」

「開いていいよ……」

「スバル：大丈夫か？」

「はい：暁さん」

やはりスバルには元気がない。

「そうか：敵の事がわかったぞ：今から来れるか？」

「：今からですか？」

今はまだ昼間だが、今のスバルは行く気になれなかった。

「ああ：敵の力がわかった。会議は遅くまで続く。もし来るんなら泊まりがけだ」

泊まりがけ：

スバルはWAXAに行く気はしなかったが、家にいるよりはましだと思った。

それに、敵が何なのかも気になる。

「わかりました。行きます」

「いこうか…ウォーロック」

「ああ……」

二人はWAXAへ向かう

「トランスコード」

↓
WAXA
↓

「よく来たな…スバル」

WAXAの入り口には暁が立っていた。

「お久しぶりです」

「スバル…今日の会議に出るか出ないかは、これを聞いてから決めてくれ…」

スバルは短い頷いた。

「まず電波体、ブラッドの事だが、」

ブラッド…スバルが殺してしまった電波体。

彼は死んでもデリートされなかった。

死体が残っているのだ。

それだけにスバルは心配している。

自分は人殺しなんじゃないのかーと

「結論から言わせてもらう。

彼…ブラッドは…特殊なスーツをきていた……

人間だ」

人間？ニンゲン？ヒト？

僕は……人殺し……？

「う、ウソだああああ……！！！！」

スバルは狂ったように発狂する。

「オイ！落ち着けスバル！！」

ウォーロックはあわてだす。

「じゃまだ！ウォーロック！！
アシッド！！」

「了解しました……」

そういつてアシッドは、

超音波のような音を響かせる。

その音を聞いたスバルは、
発狂するのを止め、気絶した……

敵（後書き）

内容がハードすぎる気が・・・
（汗

最悪

I W A X A

医務室ー

「落ち着いたか…スバル」

シドウは優しくスバルに話しかけるが
スバルはまだ震えている。

スバルは確かに今までたくさんの敵を葬ってきたが、
人を殺めたのは初めてだ。無理もない…

「落ち着けないよな…俺もディーラーに
いたころ初めてー」

「いいですよ暁さん…」
シドウにもスバルの気持ちがわかるのだろう。

しかし、スバルもシドウの気持ちがわかるのだ。
今のスバルにはわかる。

シドウが無理して話をしようとしたことが。

だから話を止めたのだ。

「スバル：今いうのも何なんだが、
今しかいえそうに無い。
悪いが、聞いてくれ…」

また悪い話……

スバルは顔をものすごい勢いで
横に振った。
だがシドウは話を始める。

「新たな組織が動いた…敵の組織の名はわかっていない。
その組織にブラッドも所属していたようだ…」

ブラッド、と聞いて、またスバルは
涙を流した。

それでもシドウは
話をすすめる。

「奴らの戦力は、今までの電波変換ではなく、
電波をまとうスーツ…それを着てブラッドも戦っていた。
……………」

この組織と戦うということは、敵を倒さないといけない。
つまり敵をこー」

「じゃあ僕は戦わない！
元々嫌だったんだ！戦いなんて！
もう世界を三回も救ったのに……
もういいじゃないですか……ううっ……」

「わかった……今回はお前を外す。
だが、また世界の為に、友達の為に、
戦おうと思ったら来てくれ」

「そんなこと……もうありませんよ……」
落ち着いたスバルはゆっくりと言う。

「そうか……今日はゆっくりしていけよ……
学校は行けよ？
じゃあな……」

そういつてシドウは
医務室をあとにした

最悪（後書き）

感想、まってまゝす！

偽者（前書き）

更新遅れました m
┌
└
m

偽者

スバルがWAXAで話を聞いているところ――

ーコダマタウンー

もう外は暗い。空には星一つ無い。

ミソラはそんな空を見て、ふと不安になった。

ミソラは今、マンションをでて、スバルの家に向かっていった。理由は、特にない。

ただ、なんだか嫌な予感がしたからだ。

ー星河家ー

「今日スバル帰って来ないんだって」

あかねが三人に言う。

大吾もあかねもスバルの

事ではやく帰ってきたのだが、

とうのスバルは、WAXAに泊まるらしい。

その時大吾はすでにWAXAをでていたので、知らなかったのだ。

「そうか…まあWAXAなら大丈夫だろ」

二人は無言だ。

さすがにスバルがいないと、さぞ気まずいだろう。

ピンポーン

音を聞いた途端、二人の体は、ビクッ、とふるえた。
今日スバルが行ってからもずっと
マスコミがうるさかったからだ。

だが、驚く必要はなかった。
モニターを見ると、そこにはミソラの姿が。

「遅くにすいませ〜ん！
スバル君いますか〜？」

「ごめんねミソラちゃん。今日はスバル帰って来ないのよ」

「そうですか…」

ミソラは残念そうに肩をおろす。
そこで…

「せっかくだし今日うちで

「ご飯食べていく？」

ミソラは食べていこうか、と思ったが、ある約束がある事を思い出して断った。

「すみません。今日はルナちゃんの家でたべる約束があるので…」

そう、今日はルナの家に関が帰って来ないのでミソラが家に行くことになったのだ。

「あらそうの？委員長さんの家で？それじゃ、仕方ないわね」

そのあとミソラはすぐルナの家に向かった。

「あら、いらっしやい」

ルナは戸をあけ、満面の笑みで、ミソラを迎えてくれた。

「お邪魔します！」

家の中にはかなり高そうな品々が並んでいた。セレブ家族のトロフィーもおいてあった。どうやったらこのようなトロフィーが貰えるのだろうか。

ミソラには関係ない事だが……

「ミソラちゃん。スバル君、どうだった？」

「いなかったよ。今日は帰って来ないんだって。」
するとルナは心配そうな顔をする。

「スバル君……大丈夫かしらね……」

なんだか暗い雰囲気になりそうだった。

ミソラはせっかく、一人じゃない食事を、
そんな雰囲気で食べたくなかった。

「スバル君なら大丈夫！……多分。」

「そうよね……大丈夫よね！」

それから数時間、女どうしの
楽しい時間が進んだ。

だが……

ピピピピンポーン

誰かがルナの家のインターホンを
連打したのだ。

「全く誰かしら。呆れるわね」

そういつてモニターを見ると、
そこには、いないはずのスバルの姿が。

「あら！スバル君！どうしたの？」

ルナが不思議そうにきくが、スバルは無言のままだ。

「ちょっと待って。今開けるから！」

そういつてルナは家の扉を開けた。

ミソラはまだきずいていない。

ガチャ

「スバル君どうし……」

ルナが言い切る前に

スバルがルナの事をなぐり飛ばした。

「ス……バル君？」

スバルはそのままミソラの方へ向かう。

「……！スバル君！どうしたの！？」

ミソラは嬉しそうな声をあげる。

だが、スバルの後ろで倒れているルナをみて固まった。

「スバル君？」

ミソラは自分の目を疑った。

いくら目をこすつても、

目の前にいるのは確かにスバルだ。

いきなり、ミソラはスバルに押し倒された。

そしてスバルは馬乗りになり、

ミソラの顔をなぐり始めた。

信じられない言葉とともに。

僕はお前で遊んでたんだよー

お前は僕をもっと有名にさせる為の道具ー

きくに耐えない言葉の数々。

ミソラには、パンチより、こちらの方が、
数十倍つらかった。

ガッ

完全に今、入ってはいけない所に
パンチが入った。

ー痛ー

ミソラは薄れ行く意識の中、スバルとの
ブラザーバンドを切った――

偽者（後書き）

かなりヤバイです（汗

雑音

「スバル、これ持ってけ」

次の朝、スバルはシドウに、あるプログラムを手渡された。

「…何ですか…これ？」

スバルにはまだ元気がない。

「それは、エースPGMを元に作ったノイズ対策PGMだ。

エースPGMみたいにノイズチェンジはできない。ただ、ノイズに耐えられるだけだ」
シドウは簡単な説明をする。

「…充分ですよ。もう戦いませんか…」

ウォーロックは無言だ。

「トランスコード」

スバルは校庭で堂々と電波変換をとく。
隠れて、とまで考えれなかった。

スバルが現れると、生徒が一斉にいなくなる。

怖いのだ。

スバルが、ロックマンが。

しかしスバルは気にしない。
考えない。考えたって辛いだけ……

ブラザーは、僕を拒まないだろう。
そんな考えがスバルの頭の奥には、あった。

教室に入ってみても、状況は同じだった。
みんなスバルを避ける。

スバルはルナに話かけようとした。

「委員長、あのー」

しかしルナはスバルが話している最中に、逃げていった。

ゴンタ、キザマロ、それにツカサ、ミキまで……

なんで……？僕は人殺しだから……？

そしてスバルはジャックをみつけた。

「ジャック！」

スバルは自分を見ても逃げないジャックを見て駆け寄った。だが、

「スバル……お前、最低だぜ……」

そう言って、ジャックもスバルの前から姿を消した。

もうスバルの頭は真っ白だった。

今のスバルが考えている事はただ一つ――

孤独になりたくない――

その時、スバルの頭に一人、絶対にスバルを拒まない人を思い出した。

（ミソラちゃん！）

そう、響ミソラ。

僕は彼女を守る為に……

「ミソラちゃん！」

そういつてスバルはミソラに駆け寄る。

しかしミソラはスバルを見て、

泣きそうな目をして、逃げていった。

雑音（後書き）

感想まっています。

なんか自分で書いてても
ヤバイ気がするこの内容（笑）

孤独

スバルは教室をでて、屋上へ向かった。
もう二学期になってから、
二度目のサボリだ。

でも、今のスバルには、関係ない。

……関係はあるのだが、どうでもいい。
そんな気分だった。

どうして……？今まで楽しくやってきたのに……
……………。

そうか。僕は元に戻っただけ。
何も変わらない。いや、
今までが変わっていたのだ。

そう思う事にしようとしたが、
うまくいかない。

一度、みんなという楽しさを知ってしまったスバルには
無理なことだった。

スバルはふと、ハンターを見る。

やはり、ブラザーは消えていた。
今のこっているブラザーは、
シドウとヨイリーだけだ。

（また、WAXAにいいかな…）

そうスバルが思っていると、
ブチッ、っとハンターから音が聞こえた。

『スバル…WAXAの奴ら
とのブラザーが切れたぜ…』

ウォーロックがスバルに話す。

でもスバルの耳には届いてなかったようだ。

（どうして……どうしてなんだ！）

『ス…スバル！？』

ウォーロックはまた慌てる。

…ードクン…

「うう…」

ードクン

ドクン
ドクン

コレは…

この前も起こった、どうき…
しかも前より…辛い…

孤独を…孤独を受け入れて…

不意にスバルの頭に言葉が聞こえた。

この声は…

いつもいるようで…

あったことはないこの声…

孤独を受け入れれば…

楽に…

力（前書き）

スバルが一人で・・・

力

そうだ……

他人なんか頼ってはいけない……

力を得るには……

どんな辛い事も乗り越える、
そんな力を得るためには……

信じられるのは……

自分一人！！！！

「ぐ……ああ……」

突然、スバルは頭を抱えて、
うめき声をあげはじめた。

そのまま、地面に倒れる。

『おい！大丈夫かスバル！』

もちろんウォロックが、
スバルを心配して、駆け寄る。が…

「くるな……！」

スバルの、殺意のような、
何か、邪悪な何かがこもった声を
きき、後ずさる。

「信じられるのは…自分だけ……」

スバルは一人事のように、つぶやく。

『スバル？……』

「信じられるのは……
自分だけだああ！」

突然叫びだすスバル。

叫んだかと思うと、ノイズが
スバルの周りに集まってくる。

『なんなんだ…こりゃ…』

突然、スバルは左手を上げた。
するとそこに、ムーの紋章が
刻まれていた。

『なんでだ……？』

ここにはマズいと思ったウォーロックはハンターの中に、ひとまず非難した。

スバルの左手の紋章が浮き上がる。
ムーの紋章が、4つに別れ、ノイズとまざりあう。

「すごい……！僕はノイズ……！
ノイズは……僕だああ！」

『おい！どうしたんだよ！？スバル！』

ウォーロックはハンターからスバルに叫ぶ。

「なんだウォーロック……
君も……邪魔だよ！」

そういつてスバルはハンターを
思いっきり殴って壊した。

ウォーロックは強制的に外に出てくる。

『スバル！てめえ！』

ついにウォーロックが切れ、スバルを殴った。
でも、拳はスバルに当たらない。

『……電波障壁……！』

まさか：スバル！』

ウォーロックの声は震えている。
そんなウォーロックを無視して、
スバルは叫ぶ。

「電波変換！ 星河スバル！ オン：エア！！」

スバルがそう叫ぶと、ノイズを取り込んだ
ムーの紋章が、スバルの体に入り込む。

そして……

『ブライ：ノイズ……』

ウォーロックは絶望仕切った声で…

確かにそうだった。

力（後書き）

スバルが一人で
電波変換しちゃいました！

評価・感想まっています！

死（前書き）

初ウオーロック視点！

死

俺の目の前にいるのは、確かにスバルだ。

だが、いつものスバルじゃない……

というのも当たり前で、一度に

色々な事がありすぎてこんな姿に……

でもなんで一人で電波変換できたんだ？

スバルは。

一人で練習でもしてたのか？

今のスバルは、電波体だ。

でも、ロックマンじゃあない。

そりゃあアイツ一人で電波変換したからな。

ロックマンのロックは、

俺だろ？

じゃあ今のアイツはなんだ？

ただの「マン」か？

いや、「マン」って確かここじゃない国の言葉で
男って意味だよな。

じゃあ違うか……。

いやいや、スバルは男だから「マン」で
いいのか？

でもカッコ悪いよな。

じゃあ今はブライノイズとでもよぼうか。

ブライ・・・スバルもソロのようになっ
てしまっただろうか・・・。

それは、ツライ。

俺がつらい。

あいつはやっと絆を知ったのに・・・

どうにかスバルを元にもどせないだろうか。

なんであいつら、スバルをこぼんだんだ？

人殺しだからか？

しかたないだろ。あれは。

今のスバルはロックマンよりブライに近い。

シューティングスターエンブレムが、ない。

ごめんな・・・スバル・・・

こんな時なのに・・・

こんな事になっちゃったのに・・・

いつも一緒にいたのに・・・

俺はお前を止められない。

俺はお前に話しかける事も出来ないんだ。

俺はもう………

デリートしてしまったから。

死（後書き）

どうでしたか？感想まっています！

それと、三日後から

テスト期間なので、

この三日で更新たくさんします！

光（前書き）

意味ありげな最初の言葉・
・
・

光

(まで……いくな！ スバル！)

スバルはウォーロックをデリートし、
どこかへ、ウェーブロードを使い、
どこかへ行ってしまった。

スバルがウォーロックをデリートした理由。

簡単だ。

邪魔だったから。

今、スバルは確かな力を手に入れた。
それと同時に、スバルの中で、
彼の存在の意味はなくなった。
それだけの事だ。

ブライノイズの胸と頭の紋章が、光だす。

その光は、

ただ光っているだけのように見えた。
しかし、今のスバルには分かる。

この光が指し示す場所に、
ムーの者がある。

そしてスバルは「光の指し示す場所」へ向かった。

ーノイズウェーブー

クソ……なぜ負けた……。
ノイズの力をもものにし、
Zの力を手に入れた俺が……

俺は今、あるノイズウェーブにいる。

そこで、
戦い、
倒し、
考えているのだ。

（なぜ俺が……負けたんだ……）

いくら自分に聞いても、
いつも頭に浮かんでくるのは、
一つの単語。

絆

（フン……馬鹿らしい）

そう思いながらも、完全に否定出来ない、
弱い自分が、そこには、いた。

そんな事を、グダグダ考えていると、
俺の胸の紋章と、ラプラスの紋章が光り出した。
コレは……

ムーの生き残り……？

「いくぞ……ラプラス」

「ヌ……ゴ……」

そして俺は、「光の指し示す場所」へ……

未練（前書き）

更新ペースがバラバラ……

未練

ブライこと、ソロは、現在ウェーブロードを使い、「光の示す場所」へ向かっている。

（近い……！）

ブライがそう感じた場所は、コダマタウンだった。

（強い電波を感じる……。

……だが違う！ これはムーの電波じゃない）

ブライは気になったが一刻も早く、

「光の示す場所」へ行きたかったが

何故かブライを引きつけるものがあつた。

なぜならこの電波は、

ロックマンに似ている……。

結局、ブライは強い電波を感じる、学校の屋上に向かった。

↑屋上↑

「これは……」

ブライが屋上についたときには、
何故かノイズが錯乱している状態だった。
流星メテオGがロックマンに破壊されてから、コレほど
大量のノイズは久しぶりに見た。

「……！」

ソロは目を疑った。

大量のノイズの中心には、生気が
まるで感じられない、ウォーロックの姿が。

「……残留電波か？ 何故コイツが……？」

そこまで一人でつぶやいて、
ある事にきずいてしまった。

「クソ……！ 面倒かけやがって……！」

ブライは「カミカクシ」を使い、ウォーロックの
残留電波を異空間へ。

何故助けるのか。

もちろん、絆などではない。

コイツが消えたら、ロックマンと

戦えなくなるー

それだけだ。

それだけ…？

本当にそれだけなのか？

ブライは自分でもわからない。

こんな理由をつけて、ただ助けたかっただけかもしれない。

そんな自分に、無償に腹がたった。

だがそんなことはどうでもいい。

今のブライにとって、最も

大切な事はムーの者に出会う事だ。

今はロックマンの事は忘れろ。

怒りを押し殺し、ブライは「光の示す場所」
に向かうー

未練（後書き）

三日間の間に全然更新できませんでした。
本当すいません m（　　） m

「この三日で更新たくさんします！」……………

ははは…自分の言ったことでこんなに
笑うの久しぶりですよ……

しかもテストも一週間先でしたし（汗
ここまでドジするとは……

ドジの天才ですね（　○　；　）

とりあえずこの一週間は更新します。

長くなりました m（　　） m
感想待ってます！

銃

「やはりここか……」

ブライノイズはつぶやいた。

ムーの紋章が示す場所、
それは元々ムーが封印されていた場所……
の上空、

バミューダラビリス。

だが、ちがう。

元々ムーが封印されていた広場に、
ノイズの裂け目があった。

この先に、ムーの者が……

そう思うと、彼の心はずんだ。

（やっと…戦える！）

ーノイズウェーバー

「キサマは……!!」

目の前にいる、ムーの戦士を見て、俺の体は震えた。

ムー、伝説の戦士……

バスター!!!

「バスター……なぜキサマが生きている……?」

フライが問いかけるが

フライノイズは答えない。

というより答えられないようだ。

いきなりブライノイズが、攻撃を開始した。

ブライノイズの武器はブライソード一本のみ。

「ク、キサマアアアアア!!」

二本の剣が、重なる。

双方、同じ剣だ。

だが……

「こい！ ラプラス!!」

ブライが叫ぶと、剣がブーメランのように
ブライノイズに向かって飛んでくる。

ブライノイズはバックステップで回避、
直後にロックオン、ふたたび
元の状態へ、

ギギギイイイイ

剣と剣がこすれる音だけが響く。

沈黙を破ったのはブライだった。

「キサマのその姿……孤独を受け入れた、俺の姿……
なぜキサマがその姿をしている！」

「……なんの事だ」

ブライノイズの声は、ブライが思っていたより、
かなり高かった。

そして聞き覚えがある声だった。

ブライは剣をはじき、距離をとる。

「なんの事……だと？それはキサマの、
デストランス、じゃないのか！？」

ブライは声を荒げて叫ぶ。

もう虫のいき、といったところだ。

だが、思ったより戦えている。

（これが本当にバスターか？）

負け惜しみではない。本当に
ブライは思っていた。

「……デストランス？」

ブライノイズは訝しげに言った。
本当に何も知らないようだった。

「キサマアア！ ふざけてるのか！」

馬鹿にされたようで、見下されたようで、怒りに身をまかせ、自分の拳でなぐりかかる。

それをブライノイズは片手で受け止める。

その時、ブライは確かに見た。

バイザー越しに光る、優しそうな目。

だがいつもの目とはちがう。

怒りの炎。

そしてそれとは対照的に光る、
悲しみの涙。

彼は怒っているのか、
悲しんでいるのか。

そのことまでブライには分からなかったが、
とにかく分かった。

彼の正体が。

「キサマ……星河スバルか？」

銃（後書き）

感想まっています！

孤高

「バスターじゃ……ないのか……?」

ブライはつぶやいた。かなり
落胆している。

それもそうだ。やっと別の生き残りに
会えたと思っていたのに……
ソイツが因縁のライバルだった。

いくらブライは孤独を受け入れたから
といっても、同じ種族に会うのは特別だ。

ブライはムーの絆を重んじている。

ムーの光に導かれて、スバルとあった
と言うことは、スバルがムー人だ。ということだ。

(そんなはずはない!)

だが、ブライの目の前にいる星河スバルは、
一人で電波変換している。

ブライは来る途中でウォーロックに
あったので、それは間違いない事
がわかっていた。

「ロックマン……いや、星河スバル……
キサマは何故、一人で電波変換出来る?
それはムーの力だろう!」

「そんなことは知らない！」

……こっちがしりたい事の方が
多いんだああ！」

ブライノイズは叫ぶとめちやくちやに
剣を振り回します。

「……それで強くなったつもりかああ！」

ブライは冷静にすきをつき、腰のあたり
を切る。剣道の、銅のような形だ。

「……ぐっ……」

スバルの電波変換が解ける。

「…キサマの強さの本質は……

絆の力だろう！　こんなキサマと戦っても、
意味はない！

…キサマは孤高にはなれない。

今のキサマは、ただ、

……孤独なだけだ……」

ブライは軽蔑した目を、スバルに向けた。
そしてノイズウェーブをでて行った。

「・・・」

スバルは、わかっていた。

こんな事しても悲しみは癒えない。

いくら戦っても、悲しみは癒えない事を。

(僕は……どうすれば……)

そしてスバルの意識はとうのいていき、

消えた。

真実（前書き）

今回は二話完結です！

真実

これはスバルが「光の示す場所」へ向かったあとの話……

「……………」

いつもゴンタ君達のせいでうるさい授業も今日は静か。
えんぴつが、ノートをこする音だけが聞こえる。

スバル君はいつもとかわらない顔して授業をうけている。

なんで？

なんであんな事しといてふつうの顔できるの？

言いたいこと言ってスッキリしたから？

今まで、私達の事、そんなふうに思ってたの？

聞きたい。

でも聞けない。

怖い。スバル君が。

またあんな事になるような気がする。

そしたらもう耐えられないだろう。

私はどうすれば……

「……びき………響！」

ガバツ！

「…ハア、ハア……」

みんなの視線が私にあつまる。

スバル君はちらりとも見ない。

「大丈夫か響。かなりうなされたぞ」

先生はいつの間にか私の目の前にいる。
私が寝ている間にきたのだろう。

「……大丈夫です…すいません」

「そうか。だが気分が悪くなったら言うん……」

バタッ

「……ここは…?」

あれ?あのあとどうしたんだっけ?

「保健室よ。ミソラ」

いきなりハープがでてくるので私はびっくりしてしまった。

「……あ、そうなんだ」

自分で聞いたのにまるで無関心。
我ながら失礼だ。

「ホントにだいじょぶ?

昨日からおかしいわよ？」

ハープには、昨日のことを話していない。

その場にいなかったし、自分から

あの時の事なんか口にしたくないからだ。

そういえば昨日ハープはどこにいたんだろう。

そのことを、私は聞いた。

そして私は知った。

真実とともに。

真実（後書き）

感想待ってます！

関係ない話します。

オペレートシューティングスター、
めっちゃくちゃ楽しみなんです！

ブラザーバンドはありますか？

でも時代はEXEだからないかも…

以上、関係ない話でした！

正体

私はとんでもない事をしてしまった。

全部私の勘違いだった。

なのに今、すごく傷ついてるスバル君を、
あんなふうに見え。

今スバル君は、どこ？

私は先生に早退する、と言い、学校をでた。
でも、私はもどらなければいけない。

「トランスコード！004！ハープ・ノート！」

そう私は叫んで電波変換して、学校にもどる。

これで私は家にいることになる。

でも私はアイツを尾行する。

正体を、あばくのだ。

「ほら、ミソラ！　はやく行きなさいよ！」

今私はアイツの後をつけている。

そしてアイツは、私が絶対に入れないところに入ってしまった。

「……無理……私には無理だよっ！　ハープっ」

あれ？おかしいな。目からなんか水が…
あと鼻からも……

「もうっ！　アイドルがそんな顔しない！
たいしたことじゃないでしょ！」

とハープはいいながら私のポケットから
とりだしたハンカチをわたす。

「だってここ……入れないよっ！」

「あゝもう！　正体あばくんでしょ！」

そういつてハープは私の手をひっぱってつれて行く。

アイツが入った場所……男子トイレに。

「ホントにトイレだったらどうするの!？」

まだ涙がとまらない。

「だってアイツまだ…スバル君の姿なんだよ！」

「その時はその時よ……って顔赤いわよ？」

ハープに言われて顔をおさえる。
たしかに暑い。

「……って言ってる場合じゃなかったわね……
……あ」

ハープが間抜けな声を出す。ん？
と思い、アイツを見てみると

「……え」

私もだしてしまった。

だってアイツ、……あの……その、
だ、……大のほうに……

「……追うわよ、ミソラ……」

ハープは目を輝かせていう。
なんで輝いちゃうの？

「いや……いやあああああ……」

結局私はハープに連れて行かれる。

うう……

でも心配する必要は無かった。
入って見るとそこはなぜか広い部屋。

異空間、というやつだろうか。

そこには、アイツがいた。

アイツは、腕に付いてるハンターに、話かけている。

「ハイド様……おそらくこれで、奴の強さ、
『絆』はうばえたかと……」

「ンフフフ……よくやった。だが
奴らの『絆』は強い。なんどくずしても
、くずしても、だめなんだ。だから……」

「そうだよ!」

そこに私はわって入る。

そうだよ、とは……

恥ずかしい。

きずかなければ、本当に壊れていた。

壊してしまった私がいったのだ。

それに、もうゆるしてもらえないかもしれないし……

とにかく私は許さない。

星河スバルをなのっていた、コイツを。

「な…なぜここにおまえが…！」

偽者は驚く。私は問答無用で攻撃する。

「ショックノート…！！」

偽者は私の攻撃をモロにうけ、その場に倒れた。
もう虫の息。

ここでやめておけばよかった。

私は怒りに身をまかせ、どんどん攻撃する。

「マシンガンパルス！」

「ショックノート！！」

そして、バトルカードを転送する。

「……ダークネス・ホール！！！」

ボオオオオオオ

「……………」

「…あれ？」

敵がなににも言わない。

まさか……

まさか……こんなことになるなんて……

謝罪

「いたぞ！ここだ！」

「ターゲット、確保！」 「危険な状態だ……いそいでWAXA直属の医療施設へ！」

……ああ、僕は……死んだのか……。

何だったんだろう……僕の人生って。

誤りたい。ウォーロックに。

理由もなくデリートしてしまって。

こうして考えてみると、罪悪感と同じだな。

今までたくさんの電波体をデリートしてきたのに

どうして人間の時だけあんなふう……

電波体に失礼だな。

僕。

あつ、そう言えば、ハイド。アイツの事、忘れてた。

考えてみたらアイツ生きてんのかな。

生きてなかったらあの時点で僕は

人殺しだったな。

まあいいか。どうせもう僕は……………

みんな……………どうして……………

スバルが目を開く。

「おい！みんな！！スバルが目、覚ましたぞ！！！！」

シドウの声が部屋に響いた。

みんなスバルの周りに集まってくる。

みんな、くらい顔をしている。シドウ以外。

あとミソラはスバルの事を直視しない。

と言うより出来ないみたいだ。

スバルとミソラの目があった。

ミソラは赤くなり、顔を背ける。

正直今の状況がつかめないスバル。

理由は五つ。

どうしてスバルは助かったのか。

どうしてスバルを避けていた

みんながいるのか。

仮に許してもらったとしても、

なぜ暗い顔をしているのか。

どうしてシドウだけ元気なのか。

どうしてスバルの事を避けていたミソラが

顔を赤らめるのか。

ざっと上げればこんなものだろうか。
まず、一つ目は明らかになった。

「良かったな。スバル。『俺の』適切な
指示のおかげですぐ迎えにいったんだぜ」

自慢げなシドウ。

「でも……どうして？ ブラザーバンド
は切れたのに……」

「ああ。ありゃあ仕方なかったんだぜ！
誤るけどさ！」

「はい？」

スバルは意味が全くわからない。

「あゝ……あのな。お前の偽物がでてきて
俺らに色々していった……」

「は？ 偽物？」

スバル大混乱。

「だから、そういう意味よ」

（じゃあ……僕のせいじゃなかったのか……）

スバルの顔に笑みがこぼれる。
だがわからない。どうしてみんな
暗いのか。

「スバル！本当にごめん！」

「本物と見分けつかなかったんだ！」

「「「ごめん！」」「」」

みんなスバルに誤った。

「なんだ…そういう事だったんだ……」

いきなりスバルは泣きだす。

「本当にごめんなさい！」

ルナも頭をさげて誤る。

「悪いのは…僕だよ…僕が勝手に
勘違いして……でも…本当に良かった…本当に……」

「スバル君……」

しばらくスバル達はみんな泣いた。
シドウは気まずくなって出ていった。

—トイレ—

「素直じゃないですね…シドウは…」

「うう…うるせー！」

素直じゃないシドウだった。

「でさ、どうしてミソラちゃんは
そこでもじもじしてるの？」

スバルはキザマロにこごえで聞いた。

「…いいんですか？ 僕がいつでも。」

急にキザマロが暗くなりいう。

自分で聞いた方が良さそうだ。

と思ったスバルは自分でききにいった。

理由（前書き）

会話ばかりです

理由

スバルはミソラに、どうしたのかききにいった。

「あの……ミソラちゃん？」

控えめにスバルが聞くとミソラはスバルを見て、すぐに顔を赤くし顔を背ける。

いきなりスバルは後ろから肩を叩かれた。

（スバル君）

スバルの肩を叩いたのはハーブだった。

（何？ハーブ？）

ハーブがこごえだったので、なんとなくスバルもこごえで話す。

（ちょっと来て！）

いわれるがままにスバルはハーブについて行く。

「ここならいいわ」

「どうしたの？ハーブ？」

「何って、理由よ！理由！ミソラの」

「え？ハーブ知ってるの？」

「そりゃそうよ！私達は一心団体よ！」

「それもそうだね」

「で、理由だけど、ミソラには絶対に口に出来ないから私が言うわ」

あつ、ハーブが言うんだ。

じゃあキザマロに聞くのと

同じだな。

と思いながらも、話始めた

ハーブに悪いので聞くことに

スバルはした。

「スバル君の偽物を見つけ出したのはミソラなのよ」

「そうなの！？じゃあお礼いわなきや」

「…もういいわね。続きを話すわ。」

で、ソイツのあとをつけて、戦ったのよ」

「うんうん」

「それで、ミソラ、怒りの余り、

我を見失って、めちゃくちゃに攻撃したの。

そしたらー」

「まさか…それでミソラちゃんが？」

スバルが真剣な顔しているものなので、ハーブは笑ってしまった。

「フッフ…違うわよ。ミソラに

してみれば、もっと大変な事よ。

それでも聞く？乙女のヒミツ」

そこでスバルは話がおかしくなってきたのがわかった。でも理由がわからないとミソラになんて声をかけたらいいかわからないのでスバルは聞くことにした。

……乙女のヒミツを。

「……頼むよ。ハーブ」

「いいのね？じゃあ続けるわ。

攻撃したのはスバル君の偽物で、あのブラッド？とか言うやつと同じスーツをきてたのよ」

ブラッド、と聞いたがスバルは何も感じなかった。

多分、みんなと和解した喜びが勝っているのだろう。

「つまり、その『電波スーツ』がスバル君の形で、ミソラ達を騙してたわけ。それで最後の攻撃でスーツが脱げて……」

「ちよっと待った！」

スバルが話を止める。

「わかったよ？つまり僕の偽物のスーツが脱げて僕を直視出来ない？おかしいよねそれ！？」

だってスーツ脱げたら中に入ってた人じゃん！なんで僕を直視出来ないのさ！」

スバルがいった事はもつともだ。

だか……

「フフフフ……いい質問だわスバル君。

このスーツはね、

本体、ボディ、アーマーに別れてるの。

まあ偽スバル君の場合は服がアーマーだったのね。

それで……アーマーだけ脱げちゃたのよ……」

「……………」

「……………」

黙りこむ二人。

「つまりミソラちゃんは……」

「……………そうよ」

そのあとスバルが再び大声で泣いた事はないまでもない。

理由（後書き）

ほら！最後の攻撃あれでしたから！

・・・すいませんでした

運（前書き）

今回は

どうしてきずいたのか、
です

運

「で、ミソラちゃんは どうしてあのスバルが偽物 かってき ずいたんだ？」

ゴンタが、その場にいるだれもがしりたが っていた質問をする。

ちなみにスバルは松葉杖 について別の部屋にいった。おそらくそこで泣いてるの だろう。

「あゝ。あれはね、」

〈回想〉

ー保健室ー

「……昨日ハーブはどこ行 ったの？」

私は話の流れでハーブに聞 いたの。

「私はスバル君の尾行よ！ スバル君が何か変な事しないように暇な時はあ とつけてるのよ！ これで浮気は一発よ！」

まあ付き合っていないんだけどね。
でもそこで、おかしい事にきずいた。

「……スバル君？　だってスバル君昨日……」
ってそこでやっとハーブは
昨日の出来事を知ったわけ。
そこで言い争いになって結局
今いるスバル君がおかしいって
結論に至ったわけ。

く回想終了く

「なるほどなるほど。つまり
運がよかったって事だね！」

いつの間にか戻ってきたスバルが言う。

「キャツ……スバル君……」

「何その反応……」

スバルは軽いショックを受けたようだ。

「ミソラちゃん……お願いだから

もう止めて……僕だって辛いんだから」

僕だって辛い、のところで
シドウは爆笑してしまった。

「ははは！ そりゃそうだよな！
なんていったってハー」

バチンッ

「いって!!」

後ろからシドウを殴ったのは
クインティアだった。
ちなみにスリッパでなぐった。

「あなたはいつもいつも……
空気をよんだ事ないでしょ」

「その場の空気なんて壊す為に俺が――」

バンッ
ゴキッ

「うへっ！ 今グーで殴ったろ！
そんな事したら誰も貰ってくれなくなるぞ！

年頃の18歳よ！」

するとクインティアはムツとしたかと思うと、その顔のまま赤くなって別の部屋に行ってしまった。

「いいんですか？ 暁さん？」

キザマロが呆れている。

「は？ 何が？」

「いや、クインティア先生でしょ！ 空気読んでくださいよ！」

スバルが突っ込みを入れる。

キザマロとスバル。

案外いいコンビなのかもしれない。

「あゝ……行かないとダメ？」

ジーー

………

「わかった！ わかったから！」

あとスバル。お前、誰か忘れてないか？」

忘れてない。忘れそうだったけど、
忘れてない。

ウォーロック。

「忘れてませんよ」

「そうか……それがあいつ、
迷子センターから届いてさ」

迷子センター、の所でアシッドが吹いた。
かなりレアだ。

「は？」

スバルは全く意味がわからない。

「しかも最悪な迷子センター
だったぜ。ほら、来いよ！

……ウォーロック！」

「へ？」

運（後書き）

感想まっています！

オペレートシューティングスターが
楽しみで楽しみで・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8339h/>

流星のロックマン ～今は青いこの星～

2010年10月11日01時32分発行